

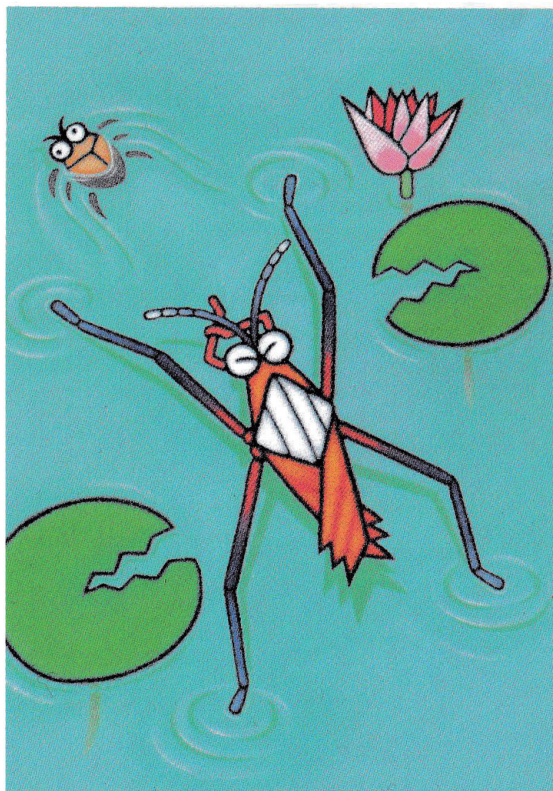
シバイタレオコリンボ

kattonāru nakamura

ドツイタロ科オコリンボ属

kattonāru sugukattonāru

■いつもカッカしていて、ささいな刺激にすぐ怒りだす。怒りだすと、脚部が過熱して赤くなる。この発熱を抑えるために水辺に棲むといわれ、オコリンボの周辺には水蒸気すがもうもうと上がっていることがある。その熱エネルギーを補給するために、オコリンボは甘いものに目がない。ガムシロップを水で薄めたものを脱脂綿にしみ込ませて置いておくと、直ちに飛来する姿を観察できる。またサロメチールの臭いにもよく集まる。



オコリンボの威嚇行為は、身を守るためのひとつの方法として選択されたものであろうが、個体同士のなわばり争いや異種間競争の手段としても有利に働く。そのため、発熱しながら怒るといふ獲得形態は、優先的に発達したに違いない。

自然界における「戦わずして優劣をつける」という競争原理に、巧みに対処した戦術ともいえるわけである。

自然界における「戦わずして優劣をつける」という競争原理に、巧みに対処した戦術ともいえるわけである。

*オコリンボの威嚇におびえて逃げるウリアゲミズマシ。このシバイタレオコリンボは関西地方に比較的多く見られる代表種である。

ドツイタロ科——オコリンボ属——アオスジオコリンボ
アカラガオコリンボ
オタケビオコリンボ
シバイタレオコリンボ

ウレスジニラミ

megakurāmu yamanakaimai

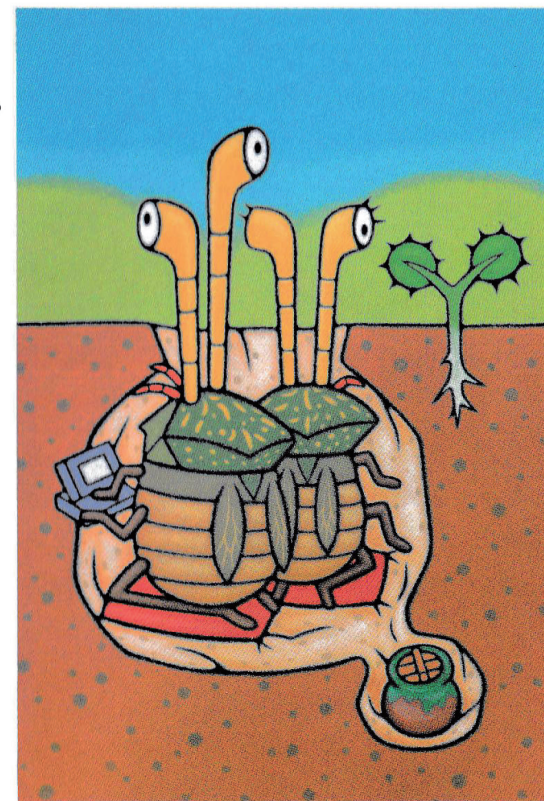
ヤブニラミ科アレコレニラミ属

kurāmu megakurāmu

■このヤブニラミの仲間は、地中での幼虫期間が特に長いことで有名だ。成虫になっても地上へ出てこない個体も多く、中には一生土の中で過ごす変わり者もいる。

地上に出るのはもちろん繁殖のためでもあるが、うっかり這いだと、世間の荒波にもまれてしまうかもしれないと、潜望鏡のような目でタイミングを計っているのだ。この虫の慎重さは尋常ではなく、異常度はすでに遺伝子レベルにまで達して、単なる条件反射や学習行動によって説明できるものではない。

ごくまれに、突然のこのこと地上に出てきて、痛い目を見るものもいる。これは、ミノホドシラズというシラズ科の寄生虫に中枢神経をやられた結果で、むしろ正常な個体ではない。うっかり地上に出てしまうと、さっそくカイシャオコシやムラオコシなどの天敵につかまり、幾日もたたないうちに身を細らせることになる。



ヤブニラミ科——アレコレニラミ属——オオヤブニラミ
ハッポウニラミ
ケイキニラミ
ウレスジニラミ

*潜望鏡のようにのびた目を地上に出して、にらみを怠らないウレスジニラミの夫婦。長い地下生活で貯えもでき、「つがい」になっていることもある。